

<今日の説教のポイント 出エジプト記 6 章 2～13 節>

1 これまでのおさらいができる箇所。 大事な点は同じ。

6 章 2 節～7 章 13 節はこれまでとは違う人たちが書いた文書です (6 章 1 節は 7 章 14 節につながる)。しかし出エジプト記がこれまで記して来た内容とほぼ同じで、比べて読むと大事なことは何かが分ります。

2 (2-8) 「私は主である」に注目。 信じるならこの神様!

「私は主である」(2, 6, 8) と三度も強調されています。ここで「主」と訳されている原語は「ヤハウエ」で、直訳すると「私はある (I am)」または「私は成る (I will be)」です (3 章 13 節下)。アブラハムら先祖に「全能の神：エル シャダイ」とし現れて契約を交わしたが故に (創世記 12:7, 15:7-18, 17:8, 24:6, 35:12)、その子孫であるあなたがたをエジプトの奴隷状態から救い出す、と言われたのです。大事なことは、イスラエルは全ての人にこのことを知らされるために選ばれた民であり、いわば、私たちの代表だということです (創世記 12:1-4)。

3 (9) 信じたのに訪れた苦しみ。 救いはすぐには与えられない?

エジプトで苦しい奴隷状態にあったイスラエル人たちは、神様が遣わされたモーセの言葉を受け入れました。しかし、待っていたのはさらなる重労働であり、絶望状況に至ったのです。しかし、それならもう神様を信じることをやめてしまいいいのでしょうか? 本当の信仰とは、人間には絶望状況に思えても、それでもなお神様を信じるということでしょう。人間の絶望状況は人間の外から来るものでなければ救えないからです (キルケゴールの『死に至る病』の主題：死を打ち破られたキリストの復活)。この夏、出エジプト記から追うのはこの問題です。

4 (10-13) 吃音でもあり自信を失ったモーセを用いられるのは神様!

「唇に割礼のない」とは、吃音であったことをモーセは「神様から務めを果たす能力を与えられていない」と訴えているのです (4 章 10-17 節)。なるほどと思っはなりません。神様はそれならとアロンを与えて下さって、モーセはこの難関を乗り越えて行くことができたからです。その次第をこれから追って行きます。私たち自身の信仰のために。